◆ キーワード　ワロチリ／ペルー・アンデス／ラビナル・アチー／先住民族／ウカマウ

【第四一回大会講演】

ペルーアンデスで『ワロチリの神々と人びと』に出会うまで

―ラテンアメリカのさまざまな言葉

唐澤　秀子

私は、これまでボリビアの映画製作集団ウカマウの映画の自主上映と協同制作に、また十年ほど前までは現代企画室に勤務し、退職後は編集室インディアスを立ち上げ、主としてラテンアメリカ関係の出版活動に関わってきました。目下このタイトルの『ワロチリの神々と人びと』（以下ワロチリと略します）というペルーのワロチリ地方に伝わる伝承の翻訳に取り組んでいます。今日はこのワロチリに出会うに至った経緯、なぜこの文書にひかれたのか、そのことをお話ししたいと思います。

私が中南米に今日まで関わるようになったきっかけは、今からおよそ四十余年前、一九七三年から四年弱、パートナーである太田昌国とともにメキシコを振り出しに中南米各地に滞在したことです。

最初に滞在したのはメキシコ市でした。メキシコについてみると、なにもかもが目新しく、書籍でのみ知っていた世界とはまるで違い、すこしゆっくり滞在したいと思うようになりました。現地の日系人社会の学校に臨時の教師の仕事も得て、ホテルの屋上の小さな台所付きの部屋に私たちは一年半余を過ごすことになりました。

ホテルの屋上には、私たちの住む小さな部屋と洗濯室があり、ホテルの従業員がつねに出入りしています。従業員のほとんどがメスティーソと呼ばれる、征服者スペイン人である白人系の人びとと先住民との混血の人びとです。毎日顔を合わせて挨拶をしているとだんだん親しくなり、私たちの部屋でコーヒーを飲んだり、洗濯室で話し込んだりするようになります。女性たちはシングルマザーだったり、「飲んだくれだ」という亭主があったり、決して楽な生活をしているわけではなく、またスペイン語を話しても読み書きはできないという人もいました。

食材を買うためにメルカード、公設の市場へ行きます。初めて見るような果物、野菜、生きた鶏、兎、豚の頭、氷の上に横たわる魚、どこまでも匂ってくるシラントロ（パクチーのメキシコの呼び名、メキシコの食卓には欠かせない薬味です）がこれでもかというくらい並び、売り手、買い手の他、魚の下ごしらえをする

人、荷物を運ぶ人などでごった返しています。気がつくと、スペイン語でない言葉がふと耳に入ってくることがありました。

メキシコ共和国の首都メキシコ市は、かつてアステカ王国の中心地でした。コロンブスがこの大陸に到達し、スペイン人によってアステカ王国は滅ぼされ、植民地化されました。以後歴史の変遷がありますが、スペイン語が公用語として話されています。しかしアステカの言葉、ナワトル語はいまもたくさんの人が話しています。この言葉を習いたいと思って大学で講座を探していると、教えてあげようという人がいました。ありがたく個人レッスンを受けることになったのですが、長続きしませんでした。テキストのようなものもなく、ただ単語や短文を並べるだけ、と、その当時の私には思え、全体がつかめないままに焦ったのです。日本で外国語を習得するとき、まず文法でその言語の全体像をつかむ、といった方法になれていた私には、これが学ぶ方法かという気持ちがあったからです。この頃の私の気持ちのなかには、まだスペイン語をしゃべらないの？　読み書きができない？　という気持ちがあったのです。

九月十六日はメキシコ独立記念日です。このソカロと呼ばれる政庁前の広場は全国各地からそれぞれの地域の独特な服装を着て、民芸品を持ってやってくる人びとでいっぱいになります。はじめての年、夢中でソカロを歩き回りました。鮮やかな色合いの刺繍を施した衣装に帯をつけた人びと、その人びとが売る、鮮やかな色で鳥や花、さまざまな守護神を描いたイチジクの木の皮のアマテ、独自の形と模様を染め付けた食器類、植物繊維をなめして織った敷物、籠、宗教的な意味合いを持った品、数限りない生活用品、どんなに見ても見飽きない美しいものばかり。また各地の出し物、伝統的な踊り、それぞれの地域に伝わる伝統芸能が披露されています。あちこちから聞きなれない言葉が聞こえてきます。たくさんの人が、かならずしもスペイン語を話しているわけではないのです。メキシコでスペイン語以外のさまざまな言葉を話している人がかなりたくさんいることに気がついた最初の時でした。

その後週末になるとバスにのって郊外の町に出かけることが多くなりました。お祭りの日や市のたつ日は、各地の民族衣装をまとった人びとに会います。売っているものは生活用品が多く、そして食べ物を売る人も多く、ちいさな火を起こして炙ったり、煮たり、揚げたり、その地域の独特な雰囲気を感じさせられます。グアテマラとの国境ちかいマヤ系の人びとの多い地域に行くと、小さな地域ごとに衣装も言語も違うそうで、赤や青の刺繍模様もそれぞれ異なる衣装をまとった人びとに出会います。村々の間をつなぐのはトラックで、人も売り物の農産物も、鶏などの家畜も一緒に乗っていました。こんなトラックのなかで現地の言葉で話しかけられれば、もうなんと答えてよいか分からず、日本語で応じ、おたがい分からないままにそれでも話しつづけて、なんとなく嬉しい気持ちで挨拶をして別れてゆきます。帰国して二十年近くたった一九九四年、この地チアパスではサパティスタ民族解放

軍と名乗る先住民族組織が、米国とカナダと自由貿易協定を結んだメキシコ政府に抗議して武装蜂起しました。新自由主義的経済秩序は、先住民に対する死刑宣告に等しいと訴えたのです。思い出深い土地だけに、心が揺さぶられました。

メキシコでの一年半はこんなふうに過ぎてゆきました。一年半の後わたしたちは再び荷物をリュックサックに詰め、南へと旅を続けます。

メキシコ市のあと、最初に比較的長い時間を過ごしたのは、グアテマラの首都グアテマラ市です。着いたのはちょうどクリスマスの時期で、私たちのようなバックパッカーでも泊まれるような安い宿の床にも松葉が敷き詰められ、とても良い匂いがしていました。そんな細やかな感じがあって、グアテマラは私のとても好きなところです。メキシコより先住民系の人びとが一層多いと感じました。

ここでも大学などの催し案内を見て、よく出かけました。たくさんの人と出会ったのですが、そのなかで先住民の出身で、首都で技術者として職をもって働いているマティアスとその家族と親しくなりました。彼らとはだんだん親しくなり、年に一回の大きなお祭りがあるからと、私たちを彼の故郷ラビナルへ誘ってくれました。バハ・ベラパス州にあるラビナルは、高地の清涼な気候と、おいしいオレンジで有名な美しい地方だといいます。グアテマラ市を朝早くに出発し、だんだんと高地に向かいます。途中のアルト・ラパス地域も松の木が茂り、谷川には澄んだ水が流れ、畑には豆やとうもろこしや、その他名前を知らない作物が実っています。もう暮れなずむころにラビナルの谷間に入っていくと、かすかに音楽が聞こえてきます。ぽつぽつと建つ簡素な家。マティアスの両親の住む家は、寝室が三室くらいとみんなが集まる部屋と簡素な台所があり、家の周りには花やレモン、食用にするための実をつける灌木が植えられ、外側には小さな畑があったような記憶があります。お手洗いと水を浴びる小屋がその庭にしつらえてありました。夜になると、小さな灯りがともるだけ。空は満天の星。マリンバの音が真夜中までかすかに響いていました。翌日祭りの場に行くと、大きなマリンバがマリア像の前に置かれ、いかにも普段は野良仕事をしている風情の農民が、ばちを両手に三本ずつも持って熱心に弾いていました。マリンバの端の方では小さな子どもが無造作に鍵盤の上で遊んでいたりします。音楽が特別のことではなく、日常の延長であることが感じられる風景でした。

すっかり祭りの様子に引き込まれている私たちに、マティアスは嬉しそうに、話したかったのだと切り出しました。

このラビナルには祖先から伝わった劇がある。スペイン人たちがやってきてこの地を支配し、私たちの信ずるものを邪教だとして禁止し、キリスト教に改宗することを迫った。そしてその劇も厳禁された。だが、私たちは密かにその劇を演じてきた。いまから二百年ほど前、ようやくキリスト教会が私たちの伝統を認め、劇の上演を許した。そのとき私たちは歓声をあげて、

劇で演奏する音楽を奏で、踊り歌った。その音楽をあなたたちにも聞かせてあげたい。その劇を見せてあげたい。すでにスペイン語訳が出版されているが、その訳は、私には気に入らない。というのは、私たちの言葉も信条も習慣も知らない者たちが訳しているから、不完全なのだ。私自身が試訳をしてみた。いつか出版したいが、私などがそうするのは、伝手もお金もなく、難しいと（一六二五年に禁止され、以来一八五六年に解禁されるまで密かに演じられていた。語り伝えていた先住民からフランシスコ修道会の僧が聞き取りをし、それをスペイン語に翻訳したと伝えられています）。

五百余年も前のスペイン人による征服から二百年余もの間禁じられていたものが、密かに禁を犯してまで保たれていたということに、ただ驚かされました。いったいどんな力がそんなことを可能にさせたのでしょう？　残念なことに、年に一度のラビナル・アチーの上演に出会うことはできませんでした。

グアテマラを後に、さらに私たちは南へ向かって旅を続けます。

コロンビアに滞在した時、日本を出る時からコロンビアに行ったら会おうと思っていた人がいました。『神の下僕か、インディオの主人か』という本の著者ビクトル・ダニエル・ボニーヤです。それはコロンビアのシブンドイという地域で、教会がどのように先住民を抑圧しているかを詳細に調査した報告書です。

コロンビアに至るころまでに、私にもこのラテンアメリカの大きな問題は、五百余年前にコロンブスがこの地に到来し、この地を「発見」したと称し、スペインが武力をもって征服したことから生じていることを実感するようになっていました。そして先住民の教化ということを大義名分に掲げる教会権力の社会に及ぼす影響力の強さも、目の当たりにすることがしばしばありました。当時のこと、ある州の知事に若い離婚歴のある女性が任命されました。原則として離婚を認めないカソリック教会はこの女性の任命を撤回しないならば、聖週間、イースターのミサを執り行わないと、州政府に迫ったのです。教会がミサを行わないことが何？　と、非キリスト教徒の私には、それほど重大なことなのか訝しく思うくらいでした。だが大混乱の後、ついに州政府が任命を撤回せざるを得なかったのです。この件があった後、ボニーヤに会ったとき、彼がカソリック教会のあり方を厳しく批判するこの本を書いたために、教会から破門されたときの心境を語ってくれました。先住民を同等の人間として認め、その権利を擁護する彼のような確信を持った人ですら、毎日曜日、教会の広場前で神父が「ビクトル・ダニエル・ボニーヤを教会に逆らった罪で破門する、永遠に地獄で苦しむ罪人だ……」と弾劾告発するのを聞くのは、本当に耐えがたかった、辛かったと。後に知り合った先住民の人びとからも、教会、神というものから自由にものを考えることができるあなたたちが羨ましいという言葉を聞きました。

その後コロンビア南部の小都市コリントで先住民の全国大会があることを知り、その集まりに行ったところで再びボニーヤに出

会いました。その当時コロンビアでは先住民の権利回復の運動が活発でした。そうした意志を持つ人びとの集まりであったので、軍の監視下にあり、帰りのバスには銃を構えた兵士が乗り込んで荷物検査をするような大会でした。そこで出会ったことで、ボニーヤは私たちに対して信頼感を持ってくれたのだと思います。何人かのリーダーを紹介してくれました。ボニーヤの口添えもあって、土地回復運動の実践地を訪ねることができました。バスを乗り継ぎ、小さな山々がうねるように続く山道を相当歩いてようやくたどり着くような遠い離れた奥地の村です。彼らのひとりの小さな小屋に泊まらせてもらい、開墾に一緒に行かせてもらいました。開墾に当たる間にもひとりは馬に乗って、絶えず外からの動きに注意を払っていました。その作業に加わったのは二十人くらいだったでしょうか、数人は小さな鍬のようなものを持っていましたが、あとは木の枝くらい、ほとんど道具らしいものもないままです。一列にならんで一斉に耕しはじめます。一仕事を終えると、畑のすみで火を焚き、大きな鍋に収穫したばかりのジャガイモを水煮にしてみんなで食べたその美味しかったこと。夕方には一日の仕事を終え、口々に話し合い、収穫物を出荷用、生活用に分けて帰りました。泊めてもらった家は、この家が特別貧しいのではなく、大体がそのくらいの様子なのですが、床は土を固めた土間、壁は骨組みに茅のような草で囲っていたような記憶があります。夫をなくし、一人暮らしの女性でしたが、このグループの主だった人のひとりのようでした。夜になると何人かの仲間がやってきて、このグループがどのように土地回復の動きを進めたのかを話してくれました。

最初のころは共同で畑をやるなんて、とか、みんなで平等に分け合うなんて、できるのかねとか勝手なことばかり言っていた、今思い出すと、まあ、よくあんなことを言っていたね、と笑いあうよ、と笑っています。土地を共有してといっても、先住民の共有地の多くは、私有という観念に馴染んでいないことから、安値で買い取られたり、だまし取られたりして、現在はほとんどの人が土地を失っていました。公用語であるスペイン語もほとんどの人が知らない、そんななかで話し合いを重ね、すこしずつ事実を知り、納得しながらやってきた。今は、昼の共同工作に見るように、グループで開拓し、収穫は平等に分け、市場にもグループとして出荷してむやみに買いたたかれないようにしている。夜の闇と、かすかな灯りは人の気持ちを近づけるようです。ろうそくのまたたく光のなかで、彼らが口々に語る内容をいまは多くは思い出せないけれど、自分たちのことを知ってほしい、気持ちを分かち合いたいという願いが伝わってきたことは、強く胸に残っています。

次にエクアドルに移ったとき、私たちはボリビアの映画制作集団ウカマウと首都キトで出会います。彼らが製作した、アメリカ合衆国の平和部隊が、南米各地で本人の合意を得ないまま行っていた不妊手術を告発した『コンドルの血』という映画はメキシコでもすでに名前は知っていました。上映には横やりが

入ったりして観る機会がなかっただけに、真っ赤な地に銃を構えた先住民青年の強い表情のポスターが街角に貼られているのを見て、すぐ上映会に行きました。アメリカ合衆国の価値観を最上のものとして教えてやるという目線の平和部隊と、祖先から受け継いだ自然のなかで足ることを良しとし、家族を生み育てることを願う先住民の生活との対比、最後には不妊手術に反対する村長を殺され、立ち上がる決意をする人びとの強い表情。これまでにない先住民のまなざしを感じさせる映画に強く心を惹かれ、ポスターだけでも持ち帰りたいと思い、事務局に頼んでみると、思いがけないことに監督とプロデューサーが居るというのです。私たちとウカマウとの出会いはこんなことから始まりました。その後も監督のホルヘ・サンヒネスとプロデューサーのベアトリス・パラシオスとは旅の間に各地で偶然一緒になり、何度かの出会いで信頼を深めていきました。彼らの作品のひとつ、『第一の敵』は、なかでも思うことが多いものです。ストーリーといえば、アンデスの寒村に軍事政権に反対し、革命を目指すゲリラがやってきます。やがてゲリラたちは村人の心をつかみ、村人もゲリラとともに戦う決意をします。しかし強大な敵の前に敗北する、が、未来へ向けて勝利まで戦う決意を示しつつ、映画は終わります。この映画の感想を監督たちに求められたとき、場面転換の度に村の長老が出てきて、こんなことがあった、と、語り、そしてその意味するところを語って映画が進行していくことに大きな違和感を感じたと話したところ、彼ら、ホルヘとベアトリスは、それは不思議だ、アンデスの村々で上映すると、村人が一番好きなのは、この長老が語るやりかただと言う。ホルヘ・サンヒネスは彼の著書『革命映画の創造』のなかで、こんなふうに書いています。

「語り部の起源は民衆文化の中にあります。農民たちの間には、昔から、旅をしては人々に物語を話して聞かせる、話の名人とでも言うべき人がいます。彼らは話をするとき、まず初めに総括的なことを語ります。映画の中で私たちの語り部も同じ手順を踏みます『記憶の重要性を際立たせ、映画は、即時的な実際の効果を避けた、再構成であることを示しうるからです。』」

これが彼らの日常のやりかたなのだからだという。彼らは集まっていろいろ話し合って物事を決める。こんなふうに長老が起きたことを語り、説明し、それからそれぞれが思うことを話し合う。彼らの間では、なにか困難が生じたり、悩みがあるとき単独で解決しようとしたりしない、みんなの間で話し合う、という。実際、映画のなかの村人たちは、本当によく話す。口々に思ったことを話し、納得いかない言葉にはすぐさま反論が返ってくる。でもほとんど出尽くしたかと思われる頃、長老らしい人が、それでは大体みんなの総意はこういったことだね、というようにみんなの同意を求め、反対していた人たちも同意して、決める。その当時はこの長老の映画のなかでの在り方が腑に落ちなかった。今になると、語り合う社会のありようを目の当たりにしたのだという気がします。語り合う社会で生きてきた人

びとの考え方や感じ方は、書かれた文書が力を持つ、私が生きる社会で培われたものとは違ってくるのではないかと、いまだにはっきりとは分からないまま考えています。ウカマウが私たちに日本での映画上映を委託したとき、彼らは大事なこととして映画を見た後、話し合いをすることを求めました。一方的に映画という形で自分たちの考えを提示するだけではなく、それを見た人たちが感じたこと、考えたことを話し合い、自分たちに戻してほしい、相互交流こそが大事なことであり、自分たちはそれを求めていると言いました。語りの世界は、語る人だけでは成立しない、その声、その語る存在があって、それを受け取る人と反応があって、言葉だけではない交流が生じてこそ、成り立つものなのではないかと、考えさせられます。彼らの問はいまだにはっきりとは分からないまま、考えつづけています。

ペルーのリマに着いて、宿も決めて落ち着いたところで天野博物館を訪ねました。チャンカイ文明に関する織物や、陶器、その他、たくさんの出土品が展示されています。興味深い説明に時間のたつのも忘れて長い時間をそこで過ごしました。一番興味をひかれたのは、織物でした。細かな手の込んだ織物、鮮やかな色合い、大胆なデザイン。階段模様と言われる、段々を織り込んだものや、海の鳥、人がいまでも目に浮かびます。そのなかでも特に記憶に残るのは、六本の指のある手をデザイン化したものです。そのような普通ではない身体的特徴を模様化することは珍しいことではなく、神から特別に遣わされたものとして大事にするのだと説明されたと記憶しています。そして後日天野芳太郎さんにお会いした時、天野さんはペルーのアンデスから海岸にかけて栄えた文化の発掘に情熱を注がれたのですが、「こんなに手の込んだ貴重な、高価なものが王侯貴族の墓から出てくるのであれば、不思議でもなんでもない、だが、これらが一般庶民の墓である、共同墓地から出てきたのですよ。一般庶民がこんなに豊かな生活をしていた文明に興味をひかれるのです」ということをおっしゃった。一般庶民が豊かな生活を営んでいたという時代。差別の対象になりがちな通常の身体からはずれるものも、神から恵まれたものとして受け止める社会のありかたに強く心をひかれました。

天野博物館に通ううちに若い館員たちと親しくなりました。ある日、おもしろい話があるのですよ。アンデスの神話で有名なものですが、こんな話なのです。といって、語ってくれた物語り。クニラヤという全能の神が若い女神カビヤカに恋をした。でも彼女はどんな男にも心を開こうとはしない。そこでクニラヤはルクマの実に自分の精液を入れて、はたおり機に座るカビヤカの前に落としてやると、カビヤカはルクマを取り上げて食べてしまった。カビヤカは十ケ月が過ぎると、子どもを生んだ。一体誰の子なのだろう、一度も男に身を許さないまま子どもが生まれ、カビヤカは誰の子なのか、どうしても知りたくなった。ある日、全土の神々に自分のところへ来るようにと、知らせを出します。クニラヤは素知らぬ顔で、乞食のようなみすぼらし

い姿でやってきて、美々しく着飾った神々の並ぶ宴の末席に連なった。そこへカビヤカは赤子を抱いて現れ、この子の父がいれば名乗りあげてほしいと言う。だが、だれも自分だとは言わない。カビヤカはそこで、その子に自分で行って父親を捜しなさい、というと、子どもは末席にいた乞食のような男の膝に這い上がった。それを見たカビヤカは、こんな惨めったらしい男の子を産んだなんて、汚らわしい、死んでしまいたい、と叫んで海をさして走り去ってしまう。クニラヤは金色の輝く衣服をまとい、稲妻のようにきらめかせて居並ぶ人びとを驚かせ、カビヤカに呼びかける。「お～い、妹よ、カビヤカよ、こちらを見ておくれ、わたしを見ておくれ、いまはもう立派だよ。美しいよ」だが、カビヤカや振り向きもしないで走っていってしまう。クニラヤは後を追いかける。そして道々で会う動物に、カビヤカを見なかったかと尋ねる。最初に会ったのはコンドル。「カビヤカに会ったかね、どのあたりにいるかね」コンドルは答えて言う。「ああ、すぐそこですよ、すぐ追いつきますよ」クニラヤは「お前は長い命を得るだろう、野の生き物が死んだら、それを食べるのはお前だ」と言う。次に会ったのはスカンクだった。「兄弟よ、どこであのひとに会ったかね」「やあ、もう会えませんよ、とても遠くまで行ってしまったから」「なんだと。そんな知らせをもたらしたからには、その報いとして昼間出歩くことはできぬ。人間はお前を憎み、おまえは悪臭を放って夜にだけ歩くのだ」次に会ったのはビューマだった。ビューマは「あの人はすぐ近くにいますよ、追いつくはずですよ」というと、クニラヤは「お前は大変愛されるものになるだろう、人間はお祭りのたびにお前の頭をかぶって、おまえを讃えるだろう」といった。こんなふうに自分に良い返事をするものには恵みを与え、悪い知らせをもたらすものには呪いを浴びせるという繰り返しです。身近な動物たちの名を次々にあげ、その特徴をあげていくその繰り返しは、ただそれだけなのにひとつのリズムとなって、人を引き込んでいきます。巧みな語りに、きっと周りを取り囲む子どもたちをはじめ人びとは夢中になって、「すぐ追いつきますよ」とか「もう遠くまで行ってしまいましたよ」などと応答し、すでによく知っている答えが出てくると、その答えにわ～と喜んだり、「そうそう、臭い臭い。うるさい声だ」などと声を合わせていたに違いない様子が浮かんでくるような物語でした。この話をはじめ、様々な言い伝え、神話、宇宙の成り立ちなどが語られているものだというのです。すっかり興味を惹かれ、なんとか書籍となったものを手に入れたいと思いました。だが、ペルーにいる間には入手することができず、わずかにアンデスの神話、伝説、などを集めたアンソロジーに何篇か入っているものをボリビアで入手することができただけでした

その後、わたしたちはアルゼンチン、チリと周り、再び北上してメキシコまで戻りました。『ワロチリの神々と人びと』のスペイン語訳を手に入れることができたのは、ようやくメキシコに戻ってからでした。ペルーの小説家であり、人類学者であるホ

セ・マリア・アルゲダスが訳したものです。さっそく読んでみると、あるある、あのカビヤカを追っていったクニラヤの話、大洪水の話、次々と勢力を得ようと争う神々、農耕にまつわる習慣や星の話など、生活のすべてに及んでいる。物語に目を通してから解説を読んだとき、驚き、胸を突かれました。この書がこうして文字化されて残ったのは、スペイン人の征服者たちとともにインディアスの地の教化のためにやってきたカソリックの神父フランシスコ・デ・アビラが十六世紀末ころ「邪教の撲滅のために」先住民に様々な方法で改宗を迫り、日ごろどのような悪魔を崇拝し、どのように祀っていたのか白状させ、それを記録させたからだったのです。その語り口の違いから語り手はひとりではなく、あちらこちらの村々の何人も複数の人びとだったのだろうと想像されます。わくわく胸を躍らせて読んだこのすべては、強制的に、いまはこんなことは信じてはいませんがと断りながら、語ったものだったのです。だが、おそろしい神父をまえにしても、語るにつれ、語る喜びは恐れを吹き飛ばし、気持ちはわくわくと踊るのをとどめることはできず、語り手はいつしか語っている状況を忘れ、次々と馴染み深い物語を語ったのではなかったのでしょうか。

この物語のなかで、真に力のある神々はぼろをまとい、貧しげな様子で出てきて、財力あり、勢力ある者たちの蔑みに満ちた挑戦にたいして、自然界の現象や生き物たちと力を合わせて勝利するという場面がたくさん出てきます。また、空の星を見て、彼らの生活の欠かせないパートナーであるリャマの姿を描き、それに付きそう星たちを小鳥に見立て、その輝く様子からその年の作物の出来ぐあいを占います。雪を抱いた山や岩に神の姿を見、コカの葉を捧げて祈ります。そしてその由来を語って、神を敬うことを説いています。

語るという力、それは人びとのなかに代々受け継がれ、日々の行動を律し、人との関係性、自然界との関係性、いってみれば人びとそのものを形作っている精神性から生まれ出ているものではないでしょうか。この語りがどんな場面でなされたかを思う時、語ることそのことが、人にどんな力を与えるのか、奔流のようなその語る力に圧倒されます。

こんにち、この語りの世界に生きてきた人びとの生活にも、文字の世界のしきたりは否応なく力を振るっています。生まれたという証明から始まって、あらゆるところで文字と通信機器が主流の世界の中にいます。表面的には私が生きているこの日本と同じように書籍があり、インターネットで通信をしています。かつてのような語りの力はいまはどのように生きているのでしょうか。

私はこの旅で出会った長年の禁圧にも消え去ることなく、密かに生き延びてきたドラマの例を先にあげました。そして私たちがいま当たり前に思っている世界とは違う語りの世界の精神性が存在することを、ボリビアの映画制作集団ウカマウから示唆されました。

出版の仕事を通して知り合いになった作家に、昨年お亡くなりになった津島佑子さんがいます。もともと北方思考が強く、

アイヌ文化に深い関心を持っていた津島さんは、パリで作家のルクレジオさんとともにアイヌ叙事詩ユーカラをフランス語へ翻訳をするお仕事をされました。津島さんのその後の作品や、折々の発言にアイヌの人びとの世界の言葉に耳を澄ませ、聴き取ろうとする姿勢が強く伺われます。その世界は次第にユーラシア、中央アジアへも広がり、津島さんの作品を読んでいると、ともすればかき消されてしまうような少数の声を聞きとり、彼女の作品にまた新たに命を吹き込まれて共鳴していくような感じがします。同じことを中南米の今を生きる人びとに感じます。耳を澄ませ、聴き取った言葉はいまを生きる人びとのなかで新たな命を吹き込まれて、再び循環していくように感じています。そこに五百年も昔の人びとの語りはなお生きつづけているように、あの奔流のような語りの持っている力はいまも人びとに力を与えつづけているように感じています。

七十年代半ばにこのようにラテンアメリカ各地を訪れて、話し言葉、口承によるコミュニケーションに大きな刺激を受けた私は、書かれた文字に特別な価値がおかれている日本社会へ戻りました。向こうで出会った大事な表現のひとつが、ボリビアの鉱山主婦会のリーダー、ドミティーラがその半生を語った『私にも話させて』という本でした。歴史・証言・文学・芸術などの分野のラテンアメリカ関係の重要な書物をシリーズで刊行するとき、ドミティーラのこの本も入れて、私が翻訳を担当することになりました。いわば社会の底辺に生きている女性ですから、書いた文章ではなく、「語り」の本です。それを文章化しようとしたとき、私の頭に自然に浮かんだのは、私が生まれ育った長野県木曽地方の言葉、いわゆる木曽弁でした。標準語で翻訳してはおもしろみが半減する表現が、生き生きと躍動しはじめました。

書き言葉が重要視されている社会にあっても、語る言葉、口承が果たす役割は、しっかりとあるのだ、と私は確信したのです。

【参考文献・DVD】

ホルヘ・サンヒネス＋ウカマウ集団『革命映画の創造』一九八一年　三一書房　絶版。（その後、再編集して、太田昌国＝編『アンデスで先住民の映画を撮る』二〇〇〇年　現代企画室として刊行）

ベアトリス・パラシオス『「悪なき大地」への途上にて』二〇〇八年　編集室インディアス、唐澤秀子＝訳

ホルヘ・サンヒネス監督＋ウカマウ集団制作DVD『第一の敵』『地下の民』『鳥の歌』『最後の庭の息子たち』（シネマテーク・インディアス）

ビクトル・ダニエル・ボニーヤ『神の下僕か　インディオの主人か』一九八七年　現代企画室　太田昌国＝訳

ドミティーラ＋M・ヴィーゼル『私にも話させて』一九八四年　現代企画室　唐澤秀子＝訳

津島佑子『黄金の夢の歌』二〇一〇年　講談社

津島佑子『ジャッカ・ドフニ』二〇一六年　集英社

（からさわ・ひでこ／編集室インディアス）